

ADDICTAM

High-end Society Magazine

アディクタム

2

February
2007
N*020



あっぱれ
英姿飛翔。More
Stylish,
More
Tasteful.

ADDICTAM

二〇〇七年一月号

第5巻第1号通巻20号

発行・編集人 高野育郎

発行所 株式会社アムアソシエイツ

TEL (03) 5545-7561

東京都港区六本木5-17-6

THE CAR BORN
TO BE A CONVERTIBLE



CONTINENTAL GTC. 地上にはない体験を、このコンバーチブルは予感させる。

エレガントとスポーツが融合したエアロダイナミックなフォルム。新たなポテンシャルを身につけ、解放たれる瞬間を待ち望んでいる。自然と一体になりあらゆる道を走破する躍動感。静寂の中から心の鼓動が聞こえてくる。別世界への扉がここに開かれた。

BENTLEY CALL 0120-97-7797 or visit www.bentleymotors.com

東京 芝公園 03-5730-1610 東京 青山 03-5413-2100 名古屋 052-732-1861 大阪 06-6532-1018 広島 082-527-0707 福岡 092-623-2626 札幌 011-781-3399
"Bentley" and the "B in wings" device are registered trade marks. © 2006 Bentley Motors Limited.



BENTLEY

定価:2,000円(税・送料込)

カナダ

デトロイト

ペンシルバニア州

ボストン

ニューヨーク

クリーブランド

フィラデルフィア

ピッツバーグ

ワシントンDC

Philadelphia

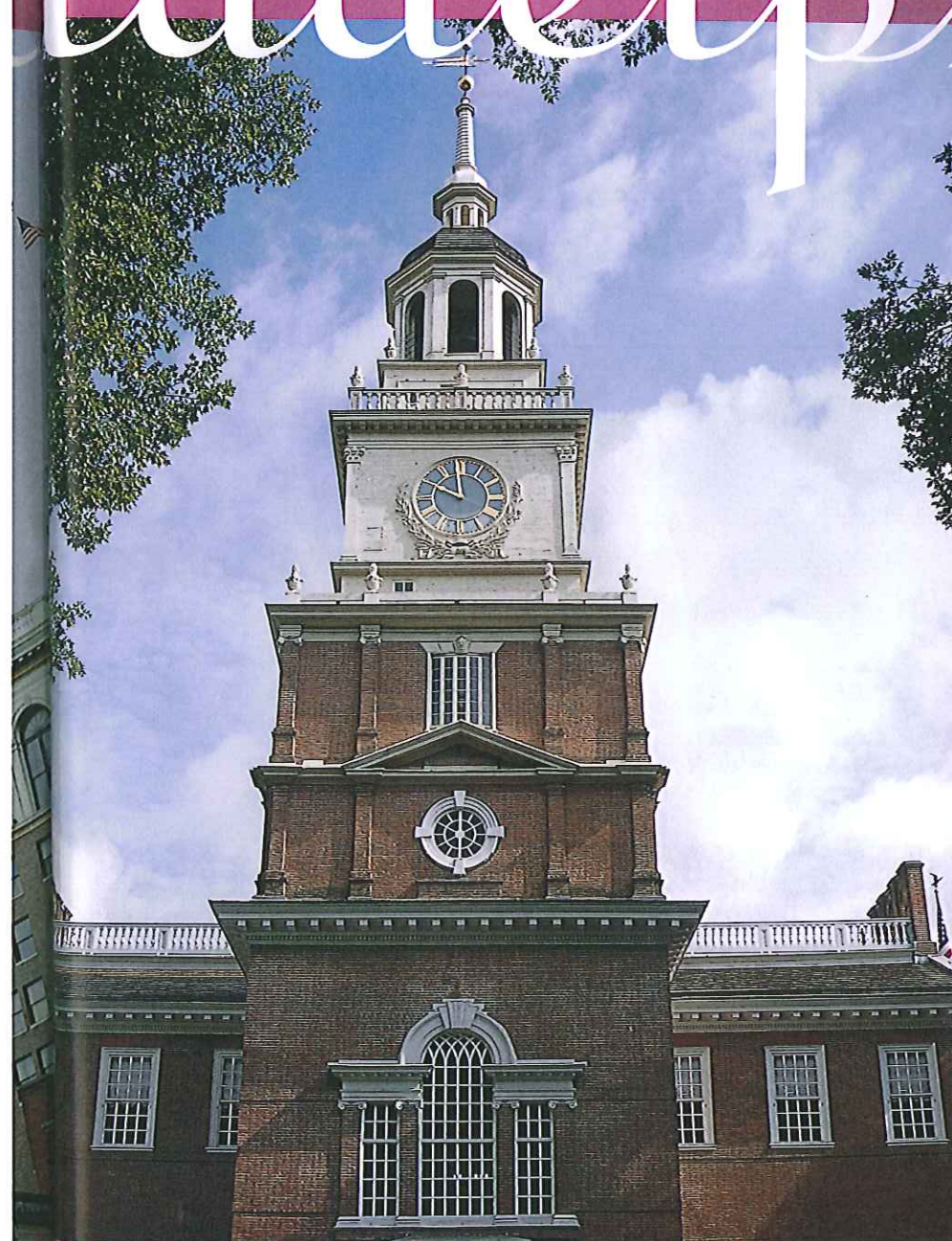
Keystone
for
Medical
Pioneers

文・写真◎中本洋一
text & photographs by Nakamoto Yoichi

フィラデルフィア
未来への発信地

医学研究のパイオニア 野口英世の夢を追って

アメリカ東部、首都ワシントンと巨大都市ニューヨークを結ぶ中間に
“キーストーン・ステート(要石の州)” ペンシルバニアの州都フィラデルフィアがある。
1776年、独立宣言が採択された合衆国誕生の地であり、建国の歴史を物語る史跡も数多い。
また、この地はわが国が生んだ世界的な医学者・野口英世博士が若き日、
不眠不休の研究に明け暮れたペンシルバニア大学がある。
野口英世の精神を受け継ぐ多くの医学者たちが日本医学界にとって
記念すべきこの地を訪れ、日米医学交流の将来を語り合った。



(右頁) フィラデルフィアの歴史地区、インディペンデンス国立歴史公園内にある独立記念館 (Independence Hall)。ここで1776年7月4日、トーマス・ジェファソンら起草の独立宣言が採択された。付近には国会議事堂、カーペンターズホール、クライストチャーチなどアメリカ合衆国建国にちなむ数々の建物が並ぶ。
(左頁) ベンジャミン・フランクリンとともに建国の父と謳われた初代大統領ジョージ・ワシントンの銅像。

学術の先端都市に集った 日米の医学者たち

合衆国生誕の地

フィラデルフィアの主要な観光名所が集まっているインディペンデンス国立歴史公園に足を運ぶと、全米からやって来たツアー客や遠足らしい子供たちで賑わっていた。公園の周りには、名物のチーズステーキ・サンドイッチや土産物を売る屋台も並ぶ。アメリカ東海岸、ニューヨークとワシントンDCのちょうど中間あたりに位置するペンシルバニア州フィラデルフィアは、まだ日本からの観光客はそれほど多くないものの、アメリカでは誰もが一度は訪れたいと願う人気の観光スポットである。

独立記念館（インディペンデンス・ホール）に入ると、ボランテア・ガイドによるレクチャーが始まった。一七七三年のボストン茶会事件をきっかけにアメリカ独立運動が起こり、一七七六年七月四日に独立宣言を採択した歴史的事実は、日本人にも世界史の授業でおなじみであろう。その主要な舞台が、ここフィラデルフィアだったのである。トマス・ジェファソン、ジョージ・ワシントン、ベンジャミン・フランクリンといったアメリカ史に欠かせない偉人たちがこの地に集結し、まさにこの独立記念館の一室で独立宣言を起草した。つまり、フィラデルフィアは文字どおりアメリカ合衆国が誕生した地といっても過言ではない。そう思えば、アメリカ人ならずとも一度は足を踏み入れたいと思うだろう。

それに加えて、フィラデルフィアには、全米初の銀行、全米初のデパート、全米初の会員制クラブと、「全米初」は枚挙にいとまがない。

東洋から来た若き医学生

このような歴史的な由来をどの程度知っていたかはわからないが、一九〇〇年（明治三十三）、ひとりの若い日本人が鉄道でフィラデルフィア駅に降り立った。後の世界的医学者、野口英世（一八七六―一九一八）である。

どの伝記にも書かれているとおり、福島県猪苗代湖畔の貧しい農家に生まれた野口清作（のちに英世と改名）は、幼少の頃に大やけどを受け、手に障害を負ってしまった。そのハンディキャップを乗り越え、血の滲むような努力を経て医学の道へと進んだというのは、日本人にお馴染みの成功物語であろう。

上京して北里研究所に勤めていた野口は、英語が多少できたことから、来日したサイモン・フレクスナー教授を案内する機会を得た。それがきっかけとなって、学歴のないために日本の医学界で研究を続けることに行き詰まりを感じていた野口は、ペンシルバニア大学に赴任したフレクスナー教授を頼ってはるる渡米を決意したのである。

十二月二十九日の朝九時過ぎ、ペンシルバニア大学ローガン・ホールの研究室にフレクスナー教授を突然来訪した野口の様子を、小説家の渡辺淳一氏は次のように描写している。

「お約束どおり、先生の下で勉強するため、日本からやってまいりました」

そういわれても、フレクスナーに約束した覚えはない。たしかにアメリカへ来い、といったかもしれないが、それは外交辞令で、本気でくるとは思っていなかった。もしくるとしても事前に連絡をよこすか、一応の了解をとるのが礼儀である。それが大きな荷物をもって、一方的に押し付けてきたのである。

「一生懸命働きますから、助手に採用してください」

いかな教授といえども、大学本部に相談せず、助手を雇うわけにいかない。

「あなたが突然、こんな形でくるとは、私は思ってもいませんでした」「何度かお手紙を出したのですが、なんとかここで使っていただけないでしようか」――渡辺淳一著「遠き落日上」集英社文庫より

結局、フレクスナー教授は英世の粘り強さに負け、個人的な助手という形で自分の研究室に置くことになった。もちろん薄給ではあったが、こうして野口がアメリカで医学を研究する土台ができたわけである。

野口は、この地で不眠不休の研究を続け、のちにニューヨークのロックフェラー研究所に移ってからも医学界に数々の業績を残した。もし、ここフィラデルフィアでペンシルバニア大学に受け入れられることがなかったならば、その後の野口英世とその輝かしい軌跡はなかったかもしれない。

医学教育発祥の地

独立宣言のとき打ち鳴らされたリバティベル（自由の鐘）。インディペンデンス国立歴史公園内のリバティベル・センターに保存されている。



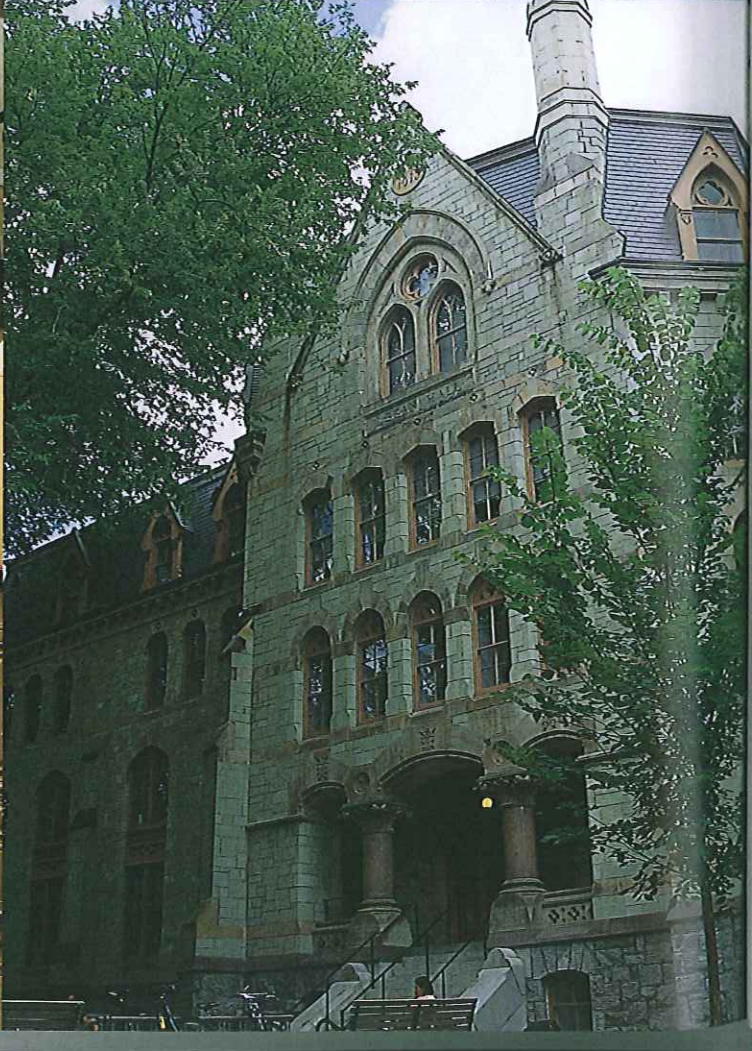
Philadelphia,
Keystone
for
Medical
Pioneers

（上）インディペンデンス・ホールの円卓会議室。内部はツアーでのみ見学できる。／（右下）ペンシルバニア大学構内にあるベンジャミン・フランクリンの銅像。同大は彼によって創設された東部きっての名門大学。／（左下）全米で初めてのメンスクラブとして創設された「Union League（ユニオンリーグ）」の外観。

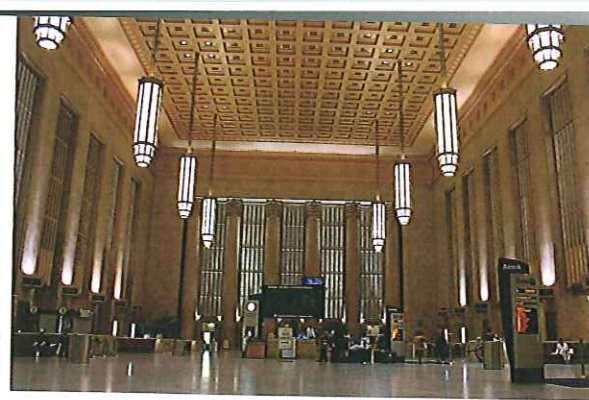




(上) スクエア・ビル川の西に広がるペンシルバニア大学の広大なキャンパス。約80もの学舎がありアイビーリーグ特有のアカデミックな雰囲気が漂う。(右) ペンシルバニア大学医学部のビル・ホールともいえるローガン・ホールの外観。若き野口英世もここに学んだ。(右下) ローガン・ホールの正面階段。



全米第6の大都市フィラデルフィアの鉄道の玄関口、サートー・ストリート駅の内部



Philadelphia, Keystone for Medical Pioneers

野口が通っていたローガン・ホールは、一八七四年に建てられたものだが、今もペンシルバニア大学のキャンパス内に残っている。

ペンシルバニア大学の創立は一七四九年。これもまた「全米初」の総合大学である。初代学長は、独立宣言の起草者のひとりであり避雷針などの発明者として有名なベンジャミン・フランクリン。キャンパス内の見晴らしのよい場所に、フランクリンの銅像が誇らしげに立っている。

二〇〇六年はベンジャミン・フランクリン生誕三百年であったから、この大学でも盛り上がりを見せたのではないだろうか。

医学部は一七六五年からの歴史があり、これも医学部としては全米初といつてよいだろう。フィラデルフィアには今もなお医学の名門校がいくつが存在するが、定評は当時からあったようだ。大学の歴史を紹介する案内板に、一八〇七年にトーマス・ジェファーソンがカスパー・ウイスター医学博士に宛てたというメッセージが掲げられていた。

「フィラデルフィアがアメリカでも格段に進んだ教育をしている科学分野がいくつもあります……貴殿のメデイカル・スクールは、解剖学を扱い有能な教授たちが揃っているという点で他にはない利点を備えているといえましょう」

この名門大学に野口が行きたいと願うのも自然なことであった。

『第二の野口英世』を目指して

野口が初めて足を踏み入れたと思われる正面玄関からホールに入ると、ローガン・ホールの由来を記した案内板が掲げられている。この建物を設計したのは初代の建築学教授であるトマス・リチャーズ。「ヴィクトリア・ゴシック様式」のデザイン、緑色のサーペンタイン・ストーン（蛇紋石）で飾られたファサードが特徴的だ。

当時の写真を見ると、円形の大講義室にはひしめくように学生が腰かけ、中央にいる教授の話を熱心な様子で聞いている。この場所で解剖実習も行なわれていたようだ。当初は三階と四階に解剖学・外科・病理学の研究室があったが、一八八八年に火災で壊滅したこともあり、野口の研究室がどの場所にあったかは今となっては確かめようがない。

しかし、かつてペンシルバニア大学医学部教授を務め、野口医学研究所の発案者でもある浅倉松生氏は、著書『フィラデルフィアの野口英世』の中で、大学に残る一次資料などを手がかりにフィラデルフィアでの野口の足跡を生き生きと描き出している。また、医学者としての観点から、野口がいかにフィラデルフィアでその才能を開花させたかという謎に迫っている。

「いったい日本人はいつ眠るのだ」と仲間たちが呆れるほど、野口が努力したことはいうまでもないが、浅倉氏は次のようにも述べている。

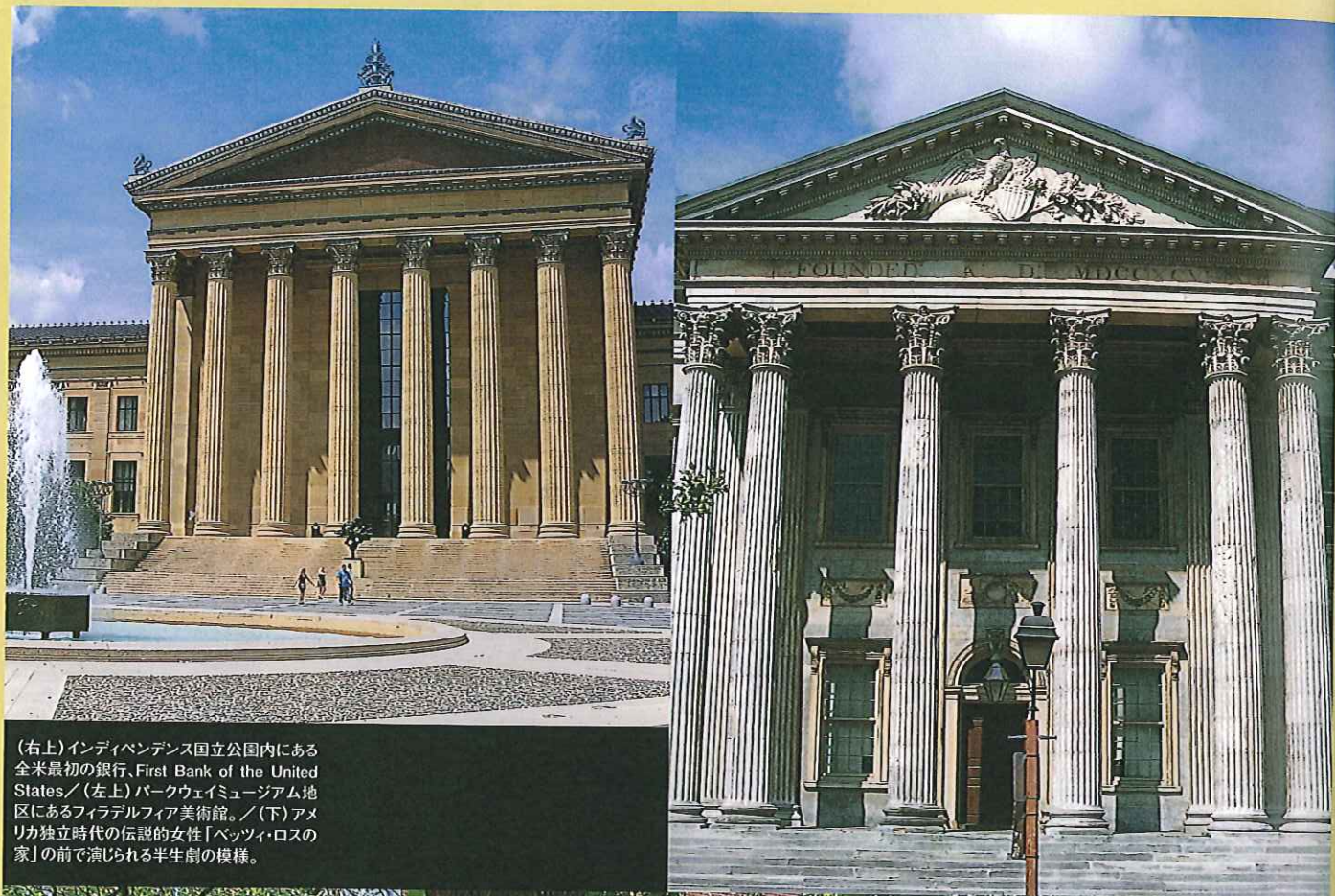
結論すれば当時の日本の研究者にとって留学するのは、外国のドクトル称号を得ることが、最大の目的だったが、受け入れ国の一つであるアメリカでは、質の良い研究をして貰うことが、理想であったのだ。野口が突如として学問的な才能を開花させた

せたま大きな要素は、形式、格といったものを重んずる日本型研究者から、質を重んずるアメリカ型研究者になるように鍛えたフレクスナーやミッチェルの指導にあったといえないだろうか。――浅倉松生「フィラデルフィアの野口英世」(三修社)より

●アメリカ旅行の基本情報
http://www.seeamerica.jp
●フィラデルフィア旅行の基本情報
http://www.philadelphiausa.travel

市内22番街とルッドロウ・ストリートの交差点の角に建つ医学博物館。さまざまな医学関係の標本資料などが展示されている。





(右) インディペンデンス国立公園内にある全米最初の銀行、First Bank of the United States / (左) パークウェイミュージアム地区にあるフィラデルフィア美術館。 / (下) アメリカ独立時代の伝説的女性「ベッツィ・ロスの家」の前で演じられる半生劇の模様。



フィラデルフィア国際文化会館館長、元フィラデルフィア市助役
オリヴァー・セント・クレア・フランクリン氏に聞く

”国際的学術都市” フィラデルフィアの魅力

日本の別の側面が見えてくるのではないだろうか。

—— フランクリンさんはもともとボルティモア（メリーランド州）出身だそうですが、フィラデルフィアに対する印象はどのようなものでしたか。

私がフィラデルフィアに来たのは八〇年代後半、工業化時代が終焉を迎えようとする頃でした。しかし、それから二十年近くが経ち、今やバイオテクノロジーや医療分野へとシフトするようになってきました。これからもまだまだ発展していく可能性を感じますね。

—— フィラデルフィアは合衆国の中で長い歴史を持つという一面もありますね。

その通りです。規模だけを見るならニューヨークやロサンゼルスにはないませんが、フィラデルフィアには日本の京都のような文化的な薫りがあると思います。一存知のとおり、フィラデルフィアはアメリカが独立した地ですから、訪れれば否応なく



Mr. Oliver St. Clair Franklin

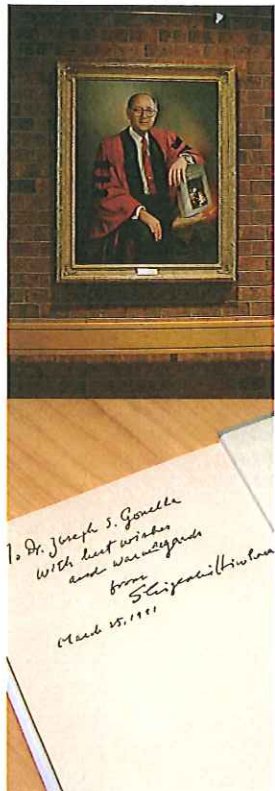
古都の魅力を語るフランクリン館長。1682年、イギリス移民によってつくられたフィラデルフィアはギリシア語で「兄弟愛」を意味する。

市内中心部に聳える高さ166メートルの市庁舎（City Hall）。尖塔の頂上にはフィラデルフィアの創設者、ウィリアム・ペンの像が立つ。



「病院の効率性を高めれば、もっと多くの患者を救うことができる」

トマス・ジェファーソン大学附属キンメル癌センターのロビーにはゴネラ氏の肖像画が掲げられていた。



日野原重明氏から贈られた著書「医学するところ——オスラー博士の生涯」(岩波書店)。見返しにはゴネラ氏への献辞が記されている。



ゴネラ氏を囲んでトマス・ジェファーソン大学の医学教育カリキュラムについて話し合う。左から野口医学研究所・浅野嘉久理事長、堺温心会病院・中井基晴理事長、大阪市立大学・西沢良記医学部長、堺温心会病院・松岡徳浩専務理事の各氏。

新しい「病院」像をめざして
さらに日本の大病院の問題点としてゴネラ氏が指摘するのは、「病院に必要のない患者が多すぎる」ということである。
ゴネラ氏のチームが、イタリア、日本、アメリカの病院の医療体制を比較した研究論文がある。ここから抜粋した表を見ると、真性糖尿病で入院しているステージ1(軽度)の患者は、日本では同じ病気で入院している患者のつち割を占める。アメリカの病院ではステージ1の患者は一人しかおらず、そのぶんステージ2・3(中・重度)の割合が圧

倒的に高いのと対照である。この問題に対するゴネラ氏の解決策はじつに明快だ。病院からホテル(宿)の機能を切り離すのである。「ホスピタル」と「ホテル」がもとは同じ語源に由来することを思い起こせば、目から鱗が落ちるような着眼点である。
「病院は、ホスピス(病人の収容施設)からホスピタル(医療施設)へと変化してきました。十七世紀までは、人間は病気に対して大したことはできなかった。むしろ、家にいたほうが安全と思われていました。しかし、医学生にとっては、多様な病に冒された人や貧しい人が集まっているホスピタルは最悪の学びの場だったのです」
これからの病院は、もっと規模を縮小し、病人のための施設に特化すべきだとゴネラ氏は語る。具体的なイメージは、以下の通りだ。
「手術を待つ患者は、病院近くのホテルに滞在する。提携ホテルはいくつか用意しておき、患者の要望や経済力に応じて選べるようにするとい

い。そして当日は、病院まで歩いてきて手術を受ける。二、三日過したら、またホテルに戻って静養するのが。私の考えでは、日本の大病院はおおよそ千床あるでしょうが、そのうちの少なくとも二割はそこにいる必要のない患者です。集中治療を必要とする患者に特化すれば、看護師も必要な部署に回すことができますし、コストを大幅に抑えることができます」
ほかにもゴネラ氏は、引き続きに要する手間を軽減し、ミスを防ぐために、通常は八時間シフトであることが多きスタッフの勤務体制を十二時間シフトに切り替える案も打ち出している。
これまでの大学や病院の「常識」からすると目新しいことばかりかもしれないが、ビジネス的な観点から効率性を考えるならばどれもきわめて合理的であることがわかる。実際、こうした考え方を参考にしながら制度改革を進めている日本の病院もあると聞く。このように、アメリカ医学界の第一人者による最先端のアイデアから刺激を受けて、日本の医療も着実に変化していくのだろう。



Joseph S. Gonnella, M.D.

トマス・ジェファーソン大学元医学部長

ジョセフ・ゴネラ氏が語る日本の医療体制への提言

日米医学界の「架け橋」的存在

およそ十五年間もの長きにわたってトマス・ジェファーソン大学医学部長を務め、現在も名誉医学部長として指導的立場にあるジョセフ・ゴネラ氏。就任以来、医学教育カリキュラムを抜本的に改革し、この名門大学をアメリカでも有数の医学校に育て上げることに貢献した。また、各国の医療体制についても研究を重ね、内外の病院で医療体制についてのアドバイスをこなしている。
ゴネラ氏が最初に語ったのは、このトマス・ジェファーソン大学が日本の医学界に多大な影響を与えてきたという歴史だった。
「日本人の医師が初めてアメリカを

訪れたのは一八六〇年。当時ジェフアーソン・メデイカル・カレッジの教授だった外科医サミュエル・グロス博士に会うためです。グロス博士が著した「外科体系」は、いったんドイツ語に訳されたあと、日本語に翻訳され、日本の外科医学の基礎を築いたことで知られています」
日露戦争後の一九〇六年には、日本帝国海軍の外科医であった高木提督(のちに日本大学を創設)が同校を訪れ、アメリカが日本の医学に果たした功績について講演した。

さらに、臨床医学の第一人者であるウィリアム・オスラーもジェフアーソンに籍を置いていた。オスラーは聖路加国際病院名誉院長・理事長の日野原重明氏が敬愛していることで知られ、日野原氏の著作でもよく紹介されているから一般の人にもなじみ深い医学者だろう。
「日野原先生は、オスラーが活躍した病院をぜひ訪れたいと希望され、フィラデルフィアにもいらつしやいました」
患者の幸福を第一に考えるオスラーの哲学に共鳴し、友情を深めるゴ

ネラ氏と日野原氏。そのふたりが今、アメリカと日本でより良い医師育成や病院のあり方に向けて精力的な活動をしているのも、興味深い話である。

現在の医療体制を考える

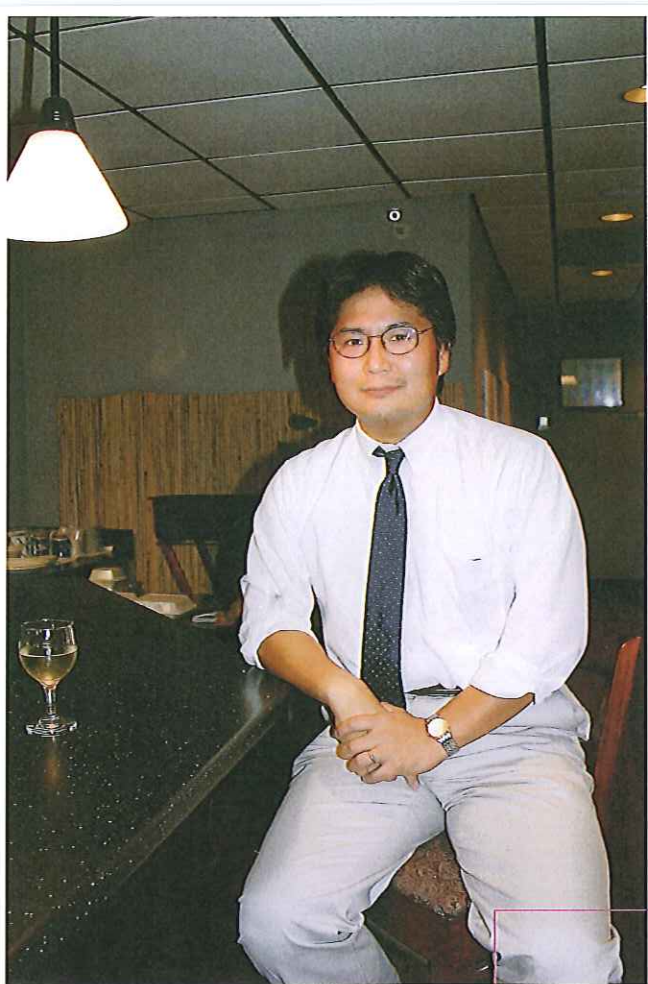
「医学学校であれば、日本であれアメリカにあり、教育(Education)、診療(Diagnosis)、研究(Research)の三つの活動を行なっていますね。ここでいけば問題になるのが、誰が費用を負担するかということです」
ゴネラ氏が問題提起する医科大学と病院のあり方は、日本の医療関係者にとつてある意味でショッキングな話題かもしれない。しかし、その内容は現代医療の効率性を考える上で実に理に適っている。

「学生が払う授業料だけでは、教育部分しかまかなうことができません。そこで、教授たちは病院で診療をすることでその報酬を得ています。それに加えて研究をしたいと思つたら、企業などからの助成金や寄付金を自分で獲得しなければなりません。私の考えでは、研究費の半分は大学が

図表1

病名	病 院		
真性糖尿病ステージ	イタリア	日本	アメリカ
1	753 (43%)	175 (68%)	1 (-)
2	708 (41%)	59 (23%)	163 (53%)
3	283 (16%)	22 (9%)	146 (47%)
	1,744	256	309

Philadelphia, Keystone for Medical Pioneers



Philadelphia,
Keystone
for
Medical
Pioneers

アメリカに 来たれ

津田 武氏

アルフレッド・I・デュボン小児病院専門医、
トーマス・ジェファソン大学医学部小児科助教授
Tsuda Takeshi, M.D.

1984年、信州大学医学部卒業後、同大医学部小児科学教室入局。89年、野口医学研究所奨学生として渡米。93年、フィラデルフィア小児病院で小児科レジデント研修終了。96年米国小児科学会小児循環器専門医認定。2002年、トーマス・ジェファソン大学医学部小児科助教授。財団法人野口医学研究所理事を務める。

志ある 医学徒よ、

米国医学界に貢献する
日本人医師からのメッセージ



佐藤隆美氏

トーマス・ジェファソン大学医学部
腫瘍医療科準教授
Sato Takami, M.D., Ph.D.

1980年、自治医科大学卒業後、大分県立病院にて研修。82～84年、大分県立三重病院内科および小児科勤務。85～88年、大分県清川村診療所長。88～90年、大分県立三重病院小児科および内科副部長。88～93年、自治医科大学小児科学教室および地域医療学教室助手。91年からトーマス・ジェファソン大学に学ぶ。2006年より財団法人野口医学研究所専務理事を務める。

日米医学交流で学んだこと

トーマス・ジェファソン大学でゴネラ氏と同じ建物内に研究室を構える佐藤隆美氏は、小児癌を主なテーマとして研究を続けている。渡米前は、地方の診療所や病院で幅広い年齢層の多様な症状の患者と接してきたという。そのせいであるうか、「人の命を救いたい」という思いがダイレクトに伝わってくる。

「もともと、トータルなケアができる医者になりたいと思っていました。患者の命が助かるのは、医者の醍醐味です。患者さんに教えられ、家族の方々に支えられ、治療が成功した症例に勇気づけられてここまで来た気がします」

佐藤氏は、一九九一年に野口医学研究所のフェローとしてアメリカに渡り、在米日本人向けの人間ドックや健康相談サービスを始めた。当時はノウハウも何もなく、理事長の浅野嘉久氏らと共に試行錯誤の連続だったという。それとともに、アメリカの大学病院に日本からレジデント（研修医）を派遣するプログラムも作り上げた。日米双方の事情に通じた医学者を育てる必要を感じたからである。

「そのときに関係者と意見が一致したのは、敷居は高くしようということでした。腐ったトマトを送ったら、二度と買ってもらえない。いったん優秀な人を送り込めば、そのあとはうまく進みます」

現在も、佐藤氏は研修医の選抜に携わっている。同財団主催のセミナー

「面接が聞かれるおりに来日し、若い医師たちと膝詰めで話をする。」

「面接で測るポイントは三つあります。一つ目は、人格評価。将来、日本の医学界のために貢献してくれるかどうか、ということですね。二つ目は、英語力。話す力がないとどうにもなりません。三つ目は、臨床能力。つまり、患者を正しく診察することができるか。医学用語を知っているかも含まれます。CSA (Clinical Skills Assessment) というモデルの患者を相手に英語で模擬診察をしてもらう審査もあります」

ひと昔前から比べれば今は英語ができる人も増え、留学も気軽にできるようになった。それでも、アメリカに渡るのには「メジャーリーグに挑戦するようなもの」と佐藤氏は語る。世界のレベルはそれほど高いのである。

現代医療の原点を見つめ直す

アメリカでの臨床研修後、東海岸デラウェア州の小児病院で循環器専門医として活躍する津田武氏は、医療関係者向け雑誌の寄稿記事で、回復の見込みがない男の子の父親と対面した体験をふまえて次のようなメッセージを伝えている（「ばんぶう」二〇〇六年一月号）。

「医師」という職業は、しばしば人間の持つもつとも崇高な輝く姿に遭遇することがあり、それを学ぶことのできる稀有な特権を有している。生きるための真摯な想い、すべての運命を受け入れる勇氣と寛容さ、そんな状態になりながらも、他人を思いやる優しさ。医師として私はそんな「生命が輝く瞬間」の厳粛な証人、Witnessにならなければと想っている。そして私が学んだその感動を、皆に伝えたいと思う」

もちろん、最初からこのように高い意識を持っていたわけではないだろうが、津田氏は中学生くらいの頃から「人を助ける仕事したい」と漠然と考えていたという。具体的に小児科医になると決めたのは、大学の実習で小児科病棟の見学に行っただけだった。

「白血病のお子さんが本当に普通の子供と同じように明るく振舞っていたのです。その姿を見ていたら、こういう子供たちのために役に立ちたいと思うようになりました」

津田氏は医学部を卒業後、五年間大学病院の医局に勤めた。その後、野口医学研究所の推薦を受けた初期

の留学生として単身アメリカに渡った。当時としては、日本でのキャリアを投げうって異国で修業をすることは無謀に等しかったが、自ら学ぶ必要と将来を考えて決断したという。アメリカではフィラデルフィア小児病院のレジデントとしてスタート。体験を積み重ねるうちに、日本の医学界の問題点もだんだんと見えてきた。

「ここに来て気がついたのは、病院内で仕事の役割分担がじつにしっかりしていることです。日本では、必ずしも医師がする必要のない仕事が多いような気がします。看護師さんもしっかり教育すればもっと医療行為ができるはずなのに、その経験が生かされていない。人手不足とよくいわれますが、実際は人の使い方がうまくないだけではないでしょうか」

もちろん、日本人がアメリカの競争社会で臨床医を続けることは厳しさを伴う。しかし、このような環境だからこそ「自分が成長する楽しさ、達成感がある」と津田氏は語る。この「プロフェッショナルリズム」の高さこそ、アメリカ社会の特徴なのである。

津田氏は、日本で開かれている医学留学希望者向けのセミナーにも積極的に参加し、医学生や若い医師に向けて自分の体験を語りかける。自分が成功するだけでなく、一人でも多くの若い医学徒が自分の後に続いて、日本の医学界に貢献してほしいという願いが、その姿勢に込められている。▲

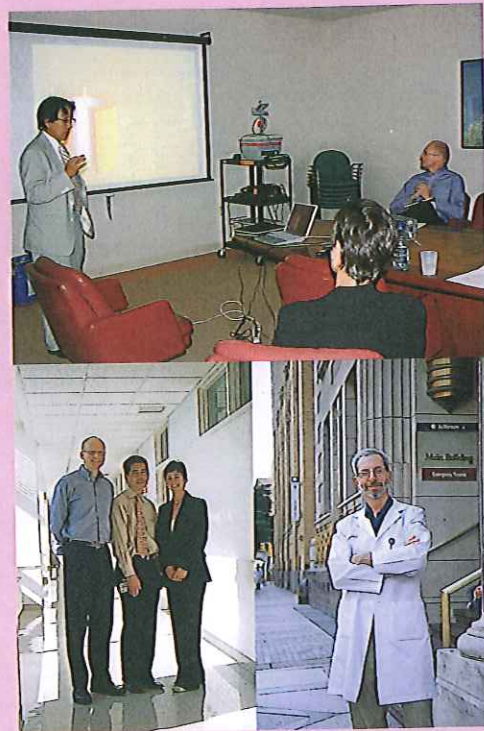
キンメル癌センター

Kimmel Cancer Center, Thomas Jefferson University

トーマス・ジェファーソン大学に附属するキンメル癌センターは、NCI（国立がん研究所）指定の研究施設であり、約150名の研究者が癌の撲滅に向けて闘っている。開発担当エグゼクティブ・ディレクターのマレン・ゴーンさんが説明してくれた概要によれば、先端的な基礎研究はもちろん、そこから得られた成果を患者の治療や苦痛の軽減に生かす活動をしているのが本センターの特徴である。また、多国籍のスタッフを集めていることにも表れているとおり、それぞれの知識や知見を交換しながら医学を発展させていこうとする姿勢が何よりも意欲的である。



今回の野口医学研究所とのコラボレーションもその一環といえるもので、キンメル癌センターからは、ハルゲア・ルイ教授、アンドリュー・コン準教授らが最新の研究内容について発表。あわせて、東京大学医科学研究所教授の清野宏氏がワクチンと関連するナノテクノロジーの研究についての講演を行ない、出席者の間で活発な議論が交わされた。



（上）専門のテーマについてディスカッションする東大医科学研究所の清野宏教授。キンメル癌センターにて／（下右）トーマス・ジェファーソン大学病院救急医療センターのアラン・フォーステター医師（Alan Forstater, M.D., FACEP）／（下左）キンメル癌センターのDr. Hallgeir Rui, M.D., Ph.D., Dr. Andrew A. Quong, Ph.D., Ms. Maren Gaughanの各氏。

医学生交流プログラム

Student Exchange Program

今回の野口医学研究所主催の研修旅行の一環として、西沢良記医学部々長率いる大阪市立大学医学部の5年生9名がフィラデルフィアを訪れた。この9名の選抜については、3名を成績順、3名を選挙、3名を抽選で選ぶというユニークな方式が採られた。「勉強ができる人と、人気がある人と、運がいい人を集めたわけです」（野口医学研究所・浅野理事長）。学生たちは、語学研修、臨床医学の講義、病院の見学実習などを通じて実地にアメリカの医学に触れ、1週間ほどの滞在であったが大いに刺激を受けたようだ。

また、佐藤隆美氏や津田武氏のようにアメリカで成功した日本人医師からアドバイスを得ようと熱心に質問する姿も見られた。この地で研鑽を受けた学生たちが今後どのような成長を遂げるか、大いに楽しみである。なお、このあとトーマス・ジェファーソン大学医学部の学生が来日し、大阪市立大学医学部で研修を受けるなど、学生同士の交流は今後も続けられる。



（左上）歓迎パーティでエールの交換をする日米の若き医学徒。（下）フィラデルフィア市内での記念スナップ。後列左より浅野嘉久・高野育郎（本誌発行人）・西沢良記・ジョセフ・ゴネラ・鶴田曜三・中井基晴・松岡徳浩の各氏。

野口医学研究所が促進する 日米の医学交流活動

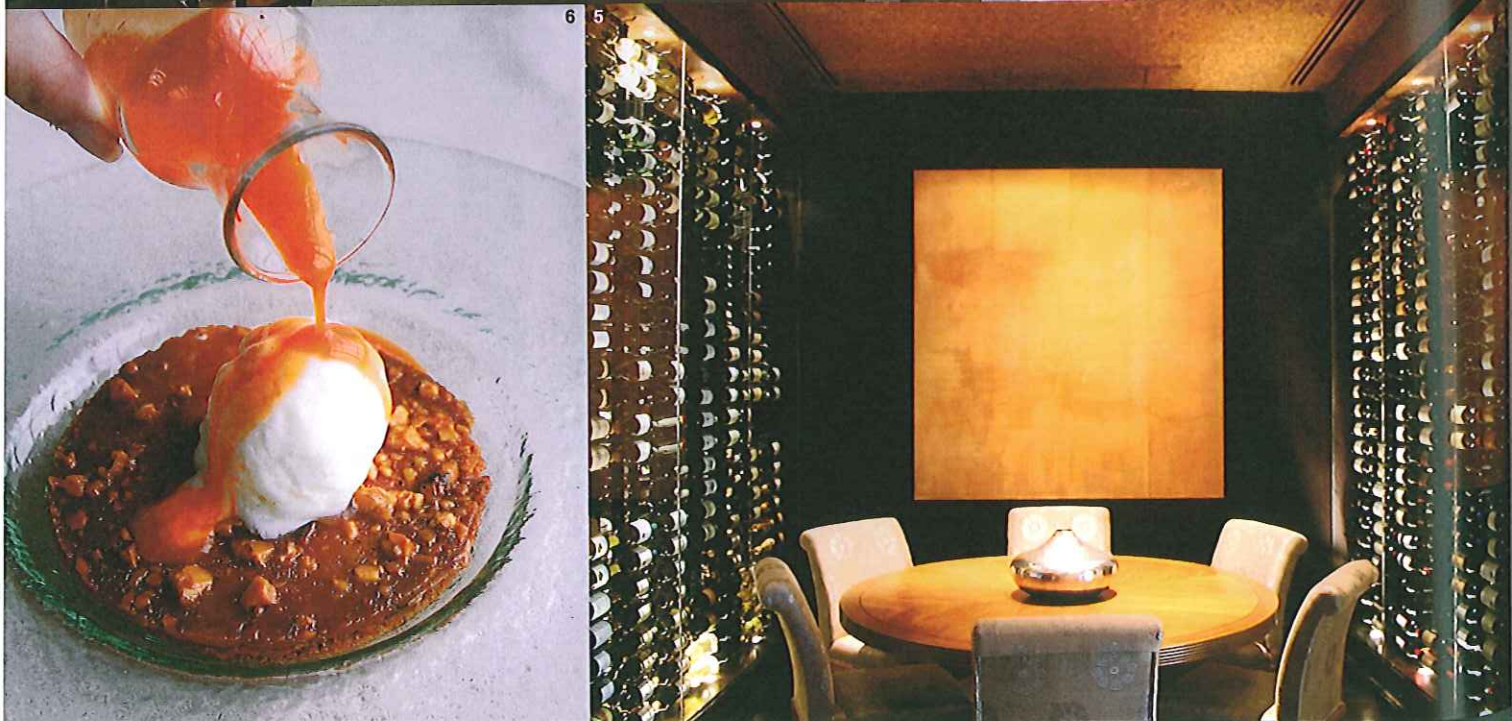
2006年8月、日本で先駆的な医学研究を進める医師・研究者たちが、野口医学研究所の招きによってフィラデルフィアを訪れた。この街には、アメリカでも高い評価を受ける第一級の病院や研究所が点在し、患者を救うために医療に情熱を捧げる教授や医学生たちがいる。日米で活躍する第一線の医学者同士が意見交換し、互いの成果を分かち合うことによって、医学をいっそう前進させることができるのである。



1. 大阪・堺温心会病院理事長・野口医学研究所専務理事の中井基晴氏とジョセフ・ゴネラ氏。2. 固く握手を交わす大阪市立大学医学部長の西沢良記教授とトマス・ジェファーソン大学医学部長のジェームズ・キーン氏。3. 東京大学医学部医科学研究所教授の清野宏氏（左端）。4. 松岡徳浩氏と津田武氏。5. 堺温心会病院専務理事の松岡徳浩氏とジェームズ・キーン氏。6. 野口医学研究所事務局の細見慶子さん（左）と野口医学研究所医療相談室室長の松島洋子看護部長（右）。7. 医療法人隆徳会理事長・野口医学研究所評議会会長の鶴田曜三氏（左）と野口医学研究所理事長の浅野嘉久氏（右）。8. 西沢良記教授夫人と野口医学研究所総務部長のマイケル・ケニー氏。9. キーン氏とゴネラ氏。



1.ロビーにはベルビュー・ストラットフォード・ホテルの栄光を伝える写真が飾られている。
2.バーラウンジは重厚で大人の雰囲気。
3.ヨーロッパ調の優雅な雰囲気に仕上げられたレストラン「IXI」(ナインティーン)。地元で採れるフレッシュな素材を使ったアメリカン・フュージョン料理が自慢。4.スイートルームのひとつ「パーク・スイート」。5.ワインセラーに囲まれたスタイリッシュな個室。6.「IXI」の料理「ツナ・サシミ」。



古き良きアメリカを偲ぶ
ラグジュアリー・ホテル

フィラデルフィアを旅して居心地よさを感じる要因を考えてみると、アメリカを代表する大都市でありながら街の規模が適度に保たれているところにもあるだろう。中心街はほぼ徒歩圏内におさまり、しかも道路が基盤目状に配されているから初めての観光客でも歩きやすい。それだけに滞在の拠点はなるべく街の中心に近い場所を選ぶほうが賢明だ。

その意味でも、フィラデルフィアのパーク・ハイアットは絶好のロケーションにある。街の南北を貫くブロード・ストリートは通称アヴェニュー・オブ・ジ・アート(芸術街)と呼ばれ、その名のとおり劇場やコンサートホールが建ち並び、文化的な雰囲気は申し分ない。

このホテルは、もともとベルヴェ

ー・ストラットフォード・ホテルとして長らく親しまれてきた老舗ホテルである。創立は一九〇四年。アメリカでも最初期に誕生したラグジュアリー・ホテルとして、フィラデルフィアはもとより全米にその名を轟かせていた。

創業当初のエピソードとして、最初にデザインを手がけた建築家に対して、とりわけグラント・ポールルームについては「いくらお金をかけてもよいから、世界で一番壮麗なものを」という指示が依頼主からあったという。このポールルームが、フィラデルフィア随一の社交場となったことはいままでもない。

今日に至るまで、ジョン・F・ケネディ元大統領、政治家のマーティン・ルーサー・キング、科学者のアルベルト・アインシュタイン、女優のオードリー・ヘップバーン、そのほかにも各界の名士たちがこのホ

テルを常宿にした。

そのような華やかな雰囲気は、ホテルの至るところで今も感じ取ることができる。とりわけ十九階のメインダイニングに足を一歩踏み入れれば、ヴィクトリア様式に装飾されたドーム上の大空間が広がり、そこからはフィラデルフィアの新旧が一体化となった街区を一望することができる。とくに夜の煌めきはまさしく百万ドルの夜景だ。

さらに一九九六年以降、「パーク・ハイアット・フィラデルフィア」の名を冠してからは、インターナショナル・スタンダードに基づいたきめ細かなホスピタリティがますます充実。24時間無料で高速インターネットが使えるビジネスセンター、コンシェルジュ・サービス、隣接のスポーツクラブへのフリーアクセスなど、仕事にも観光にも最適な環境が備えられている。A

フィラデルフィアの 繁栄を見続けてきた 社交場

パーク ハイアット フィラデルフィア
アット ザ ベルヴェー

Park Hyatt Philadelphia at the Bellevue

Park Hyatt Philadelphia at the Bellevue
Broad and Walnut St., Philadelphia, Pennsylvania, U.S.A.
TEL +1-215-893-1234
FAX +1-215-732-8518
www.parkhyattphiladelphia.com
● ハイアット ワールドワイドリザーベーションセンター
☎ (03) 3288-1234, ☎ 0120-512-343 (東京03地域外)
www.hyatt.com

Philadelphia,
Keystone
for
Medical
Pioneers

フィラデルフィアの一等地に立つザ・ベルヴェーの高层部9階分がパーク・ハイアット・ホテル。172の客室数のうち13がスイートルームという風格あふれる大人のシティホテルである。



世界最先端の 医学交流をめざして

米財団法人 野口医学研究所

浅野嘉久理事長に聞く

野口医学研究所は、わが国が生んだ世界的な医学者・野口英世博士の業績を記念して、一九八三年、日米の医学交流促進を目的にアメリカ政府の認可を受け、フィラデルフィアに設立された米財団法人である。以来、四半世紀にわたって先端医学の共同研究や日米双方の留学システムの確立など着実な発展を見せてきた。創立当初から財団運営に尽力してきた浅野理事長にこれまでの歩みと今後の展望をうかがった。

「サイエンスの血」が騒いだ 第二の転機

アディクナム編集部（以下、AM）最新の「ノグチ・ニューズレター」（二〇〇六年九月発行）に理事長は「野口医学研究所の挑戦」と題してこれまでの四半世紀におよぶ歩みを振り返っておられますが、ここに至るまでにはいろいろと感慨深いものがありそうですね。

浅野嘉久理事長（以下、浅野） あそこにも書きましたが、この二十五年の間には様々な人たちの邂逅と別離があり、苦い思い出もあつて何度か辞めようと逡巡したこともありましたが、しかし、そのたびに私自身をモティベートしてきたのは野口医学研究所が支援してきた医師・看護師をはじめとする若い医療従事者たちのひたむきな向学心でした。それが私の気持ちを奮い立たせてきたのだと思います。

古い話になって恐縮ですが、野口を語るには私が学生時代に研究生として学んだ東大医学部の栄養学教室にまで遡らなければなりません。そこで私が研究テーマの指導を受けた浅倉裕生先生という強烈な個性と巡り会わなければ、今の私はなかったかも知れません。当時、浅倉先生は新進気鋭の学者として欧米直輸入のOR（オペレーティング・リサーチ）最適計画法の理論を駆使して生物化学の研究を進めていました。私もその手法を教えられ、赤血球に関する論文をまとめることができたという思い出があります。その後、私は製薬会社に就職することになり、学生生活とは縁が切れましたが、二十年后、浅倉先生と再び巡り会うことになるとは夢にも思いませんでした。

AM それは理事長が四十一歳でア

リストルマイヤーズ社を退職される時のことでしょうか。

浅野 ええ、アメリカのペンシルバニア大学医学部教授だった浅倉先生が突然尋ねて来られたのです。先生は会うなり「ぼくは向こうで野口英世の医学を知り、いま彼と同じような医学人生を歩んでいる。ぼくは何とかして野口英世を記念する財団を作り、日米双方の医学交流を推進していきたい。どうか君と一緒に協力してもらいたい」と説得されました。私は学生時代から先生を崇拜に近い気持ちで眺めていましたから、その要請に「もう一歩も賛同して退社する決意を固めたのです」。

AM プリストルマイヤーズ社の化粧品事業部長という要職をなげうってまで野口に賭けようとしたものは何だったのでしょうか。

浅野 当時、日本人には千二百名ほどの社員がおり、ぼくは当時ナン

千円札紙幣でもおなじみの野口英世博士のレリーフ。



Noguchi
Medical
Research
Institute

野口医学研究所のあゆみ

- 1983年6月 ● 設立登記
- 1985年6月 ● 免税措置等のアメリカ政府の認可を受ける
- 日本医学交流の拠点「野口記念医療センター」設立
- 1987年7月 ● 東京・港区に財団日本本部を開設
- 1989年6月 ● 日米医学交流が本格始動
- 在米日本人医師による「野口JALINK-JSA」設立
- 1990年2月 ● 海外駐在員・旅行者のための「24時間電話医療相談（ドクター・ホットライン）」事業を開始
- 1991年5月 ● 日米間の「看護師交流プログラム」を開始
- フィラデルフィアに「人間ドック」開設。以後、各国に設置
- 6月 ● 「野口JALINK-JAPAN」設立
- 8月 ● トーマス・ジェファソンを中心とした「野口医学交流プログラム」開始
- 1992年4月 ● 日本国内向けの「ニュートドクター・ホットライン」事業開始
- 1997年10月 ● 「眼科医師会」設立
- 1999年8月 ● 夏期医学交流セミナーをペンシルバニア大学医学部で実施
- 1月 ● 「健康食品110番」事業開始
- 2000年10月 ● 野口医学研究所名古屋支所開設
- 2001年12月 ● 「ライフサポート21」事業開始
- 2002年2月 ● 第1回眼科医師部会セミナー開催
- 6月 ● 医学交流セミナー・選考会
- 2003年11月 ● 20周年記念セミナー開催
- 2004年4月 ● 野口メディカルプレミウムクラブ発足
- 12月 ● 野口・堀温心会病院M&A
- 2005年3月 ● 医学士向PBLプログラム拡張
- 2006年11月 ● 野口・長寿会病院提携

浅野 設立準備委員会には浅倉先生の呼びかけもあり、天野景康先生や尾島昭次先生をはじめ医学界の錚々たる先生方が名を列ねていました。そして何よりも財団設立の主目的である日米医学交流の促進という、錦の御旗がわれわれを勇気づけてくれました。とりわけ浅倉先生の熱弁が印象深かったですね。いわく、日本の臨床医学はアメリカと比べて三十年は遅れている！看護学に至っては八十年もだ！今日、アメリカのドクターで看護師を自分の部下だと考えている医者が二人もいない！アメリカではお医者様はいない、患者様だ！こうした言葉の一つ一つがわれわれを突き動かしました。

AM その後の財団の運営は決して順風満帆ではなかったとも伺っていますが……

浅野 ええ、その通りです。いくら立派なお題目を並べても基盤となる潤沢な資金がなければ、高邁な理想や目指すべき目標もしょせん絵に描いた餅です。これまで二十数年に及

ぶ財団の歩みは紆余曲折の連続で、雨の日もあれば晴れの日もあるという繰り返しでした。その中で第一期のメルクマールは、なんといつても一九八九年に「野口フェロー・アラムナイ」が設立されたことでした。その後、財団の経理をめぐって初代理事長だった浅倉先生が辞められたことは、財団にとっても私個人としてもたいへん辛い時期でした。あのころ日本中を狂わせたあのバブル経済が与えたダメージだったといえるかもしれません。

第二期の目標はアメリカへ送り出す留学生の数を少しでも増やすことでした。しかし、現実の数字は私が考える十分の一、いや数十分の一に過ぎませんでした。それが今年度は、大阪・堺温心会病院の中井基晴理事長（現在、同病院は野口医学研究所付属病院となっている。また中井氏は財団の専務理事に選任された）の全面的な協力を得て大幅に増やすことができました。従来、留学生数は医学部五年生が九人から十八人くら

い、ドクターが十人前後だったものが、二〇〇六年度は学生が三十名、ドクターが約二十名近くまで増え、アメリカからも若いドクターを十名招聘することができました。去年から今年にかけて財団にとって第三の成長期に入りつつあるというのが実感です。

AM 財団ではこれまで様々な事業も手がけてこられたようですが、その成果と今後の事業についてはどのように見えておられますか。

浅野 一九九〇年、海外在住者向けの二十四時間電話相談医療サービスとしてスタートさせた「ドクター・ホットライン」は実際にその恩恵を受けた方も多いかと思えます。現在、大半のクレジットカードにその保証が付いていますが、金額が固定制のため営業的には頭打ちの状態です。また翌九一年、フィラデルフィアを皮切りに開設した「人間ドック」はアメリカに四カ所、バリ、サンパウロ、中国二カ所が現在稼働中ですが、これも収益面ではなかなか厳し

新しいステージを迎える 医学交流

AM 冒頭に紹介した冊子に理事長は「幸いなことに佐藤隆美先生、町淳二先生や津田武先生という逸材をはじめ、多くの若い指導者がピラミッドを形成するように集まり、毎年のシンポジウムや留学生選考試験が、外部からの高い評価を受けながら実施されていることに、深い安堵と新たな意欲を覚えます」と書いておられますが、そうした意味でも財団は新しいステージに立とうとし



浅野嘉久 ASANO YOSHIHISA

昭和17年（1942）2月25日東京生まれ。1964年3月東京理科大学理学部化学科卒。同年6月東京大学医学部栄養学教室研究生終了。1964年4月持田製薬入社。1969年エッソスタンダード石油入社。1973年プリストルマイヤーズ入社、社長室長、化粧品事業部長などを歴任。1983年BM社退社後、独立起業と同時くして野口医学研究所設立準備委員に。1987年7月、設立となった米財団法人野口医学研究所日本本部開設に尽力。翌88年4月同財団専務理事。1989年インターナショナルヘルスサービス設立、代表取締役社長。2002年10月同財団創立者&理事長に就任。現在、業務のかたわら女子栄養大学大学院の博士課程に学び、明年終了・取得の予定。

ているわけですね。

浅野 はい、おっしゃるとおり一時期、財団から離れていたトーマス・ジェファソン大学医学部準教授の佐藤先生が専務理事に選ばれたことが大きなエポックになりました。これまでは同じトーマス・ジェファソン大学助教授の津田先生が医学交流をポリシ一面で引っ張ってこられたが、このたびの佐藤先生の復帰は医学交流の実務的なカリキュラム作りの面で大きな力を発揮してくれるものと期待しています。

AM 地に足の付いたカリキュラムとは具体的にどのようなものでしょうか。

浅野 端的に申せば、臨床医は本場の臨床実務ができなくてはいけないということ。昔は日本でもインターン制度というのがあり、今は研修医制度と専門医制度ができてだいぶ良くなりましたが、国家試験に合格すれば医者の看板を掲げられるという状況は同じです。しかし、臨床医というのはTQC（練習）と実行

↓応用・練習：Vという日々のプラクティカルな臨床実務を通じて一人前の医師になっていくものです。患者さんや看護師からの信頼や安心感も、そうしたキャリアから生まれて来るんだという自覚を、若いうちから培っていつてももらいたいというのが私たちの基本的な考えです。

実際、日本では二十四歳で医師になれますが、アメリカでは内科医は最短で三十三歳、外科医では三十五歳が普通です。わが国に比べると研修期間が十年くらい違います。高額な医療保険という制度的な違いもありますが、日本の臨床医は自分たちの実務能力についてもう少し謙虚になつて学んでいく必要があると思います。最近ではアメリカで最先端の臨床医学を学んだ気鋭の先生方が全国各地の有力病院にはほとんどおられますので、そうした考え方がこれからどんどん浸透していくものと思われまふ。ただ、大学レベルでは従来の閉鎖的な慣習がまだまだ支配的ですが、こうした壁も大学の独立法



未曾有の少子高齢化社会を迎えた今、わが国の医学界も医療システムも大きな転換期を迎えている。野口医学研究所が果たす使命もまた大きい。東京・港区虎ノ門の野口医学研究所にて。

人化の動きとあいまって急速に変わつて行くのではないかと思います。AM 財団のA医学交流セミナー・選考会Vを突破するのは超難関だと伺っておりますが、応募者数はだいたいどれくらいでしょうか。

ます。各国の歴史や文化が異なるように臨床医学もそれぞれのお国柄といたうがあります。それゆえ、臨床医学は一朝一夕でマスターできるものでもなければ、各国統一の診断基準が簡単に作れるほど生やさしいものではないと思います。そうした標準化できないアメリカンな技術や考え方をできるかぎり融合していくためには、双方の臨床医を交流させていくのが最も適切な方法です。こうした取り組みを長年やって分かったのは、医師としてのセンスや対応能力が見えるほど変わったということ。例えば問診の取り方ひとつにしても変わってきました。そして、それに加えて聴診、打診、触診によって患者さんの病状を的確に診断できるようになってきました。

わが国の病院はどこでも機器類みの検査だけで、何でもすぐに血液を採って、薬をじゃんじゃんと与えるというのが普通になっていきます。しかし、患者さんが満足するような状態になつていくかといえは大いに疑問です。今や医療を根本から変えていかなければならない時代がもうそこまできています。一言でいえば、患者さんが医師や病院を選別する時代の到来です。そうした意味からもわれわれは患者さんから本当に信頼される最先端の臨床医学を提供できる病院をもつと増やしていきたいですね。あと十五年か二十年も経ったら、野口医学研究所の理念と実務能力を兼ね備えたドクターたちが日本の医学界をリードする時代が来ることを確信しています。それが私の求める最後のゴールです。A

浅野 現在、医学交流で提携している海外の医科系大学は七十八校ですが、これを十倍の七十八校ほどに拡大したいと考えています。アメリカ各地はもうありますが、まだフランスにしか拠点のないヨーロッパはぜひ増やしたいところです。さらにオーストラリアや東南アジア諸国の有力大学とも交流を深めていきたいと思っています。

AM これまでの医学交流によってわが国の医療体制の何がちばん変わってきたかと思われまふか。

浅野 先ほども申しましたが、臨床医学における診断のやり方や進め方が根本から変わつてきたように思

野口医研がめざす新たな目標
AM 二十五年という大きな節目を目前にひかえて、財団としては今後どのような展開を考えておられますか。

浅野 現在、医学交流で提携している海外の医科系大学は七十八校ですが、これを十倍の七十八校ほどに拡大したいと考えています。アメリカ各地はもうありますが、まだフランスにしか拠点のないヨーロッパはぜひ増やしたいところです。さらにオーストラリアや東南アジア諸国の有力大学とも交流を深めていきたいと思っています。

健康産業を

総合的にサポートする

野口医学研究所

「倫理審査委員会」の活動

米国財団法人野口医学研究所では二十一年にわたる数々の研究と実績をもとに、様々な健康食品の品質テストを行いながら健康産業を総合的にサポートするシステムが作られてきた。

品質推奨認定制度としての「倫理審査委員会」がそれである。各分野の専門家によって構成された委員会は、時代のニーズを反映し、その役割がますます注目されている。



第11回倫理審査委員会には健康食品関連の企業関係者が多数出席した。

二〇〇六年九月二十二日、文京区本郷の東京大学医学部図書館で「第十一回倫理審査委員会」が多数の関係者を集めて開催された。

「少子高齢化」や「健康ブーム」の流れを受けて脚光を浴びてきた各種の健康食品や健康産業は、今や大きな曲がり角にさしかかっている。すなわち一時のブーム的な拡大成長期から一転して、より質の高い安全性を求める選別の時代に入りつつあるからだ。

野口医研の「倫理審査委員会」は強力な専門家チームによるバックアップ体制と厳密な品質審査基準によって、時代のニーズに適した機能や効果の優れた食品や製品を数多く推奨してきた。今回の倫理審査委員会でも健康食品と健康器具を販売する民間企業・社の活動報告がおこなわれて出席者の興味をそった。また、倫理審査委員長をつとめる千葉大学名誉教授・渡辺和夫氏による「薬事法改正と新しい保健機能食品の動向とその意味するもの」というテーマ

の講演がおこなわれ、法制上における様々な問題点や生産・販売面で気をつけなければならない盲点などについて丁寧なレクチャーと活発な質疑応答がかわされた。

さらに今回は特別に野口医学研究所の活動に多大な貢献をしている次の各氏の顕彰式がおこなわれた。

株式会社クリエイト エス・デュー代表取締役会長の山本久雄氏、倫理審査委員長をつとめる千葉大学薬学部長の渡辺和夫氏、東京大学医学教育研究センター長で同大医学部耳鼻咽喉科教授の加我君孝氏、野口医研付属堀温心会病院理事長の中井基晴氏の四氏であるが、それぞれ留學事業への助成、倫理審査における指導力、日米医学交流への貢献、財団運営基盤への支援など、それぞれ貢献の場こそ異なるが、野口医学研究所を支えるキーマンとしての役割が評価されたものである。ちなみに加我氏は今年度、同財団理事に就任された。A



(上)(中)倫理審査委員長・渡辺和夫氏による講演を出席者たちは熱心に聞き入っていた。(下)顕彰式で浅野理事長から賞状を授与される堀温心会病院理事長の中井基晴氏。

Noguchi
Medical
Research
Institute